

『なぜ泣いているのですか』(ヨハネ20:11～18)

聖書箇所 ヨハネ20:11～18

20:11 一方、マリアは墓の外にたたずんで泣いていた。そして、泣きながら、からだをかがめて墓の中をのぞき込んだ。

20:12 すると、白い衣を着た二人の御使いが、イエスのからだが置かれていた場所に、一人は頭のところに、一人は足のところに座しているのが見えた。

20:13 彼らはマリアに言った。「女の方、なぜ泣いているのですか。」彼女は言った。「だれかが私の主を取って行きました。どこに主を置いたのか、私には分かりません。」

20:14 彼女はこう言ってから、うしろを振り向いた。そして、イエスが立っておられるのを見たが、それがイエスであることが分からなかった。

20:15 イエスは彼女に言われた。「なぜ泣いているのですか。だれを捜しているのですか。」彼女は、彼が園の管理人だと思って言った。「あなたがあの方を運び去ったのでしたら、どこに置いたのか教えてください。私が引き取ります。」

20:16 イエスは彼女に言われた。「マリア。」彼女は振り向いて、ヘブル語で「ラボニ」、すなわち「先生」とイエスに言った。

20:17 イエスは彼女に言われた。「わたしにすがりついてはいけません。わたしはまだ父のもとに上っていないのです。わたしの兄弟たちのところに行って、『わたしは、わたしの父であり、あなたがたの父である方、わたしの神であり、あなたがたの神である方のもとに上る』と伝えなさい。」

20:18 マグダラのマリアは行って、弟子たちに「私は主を見ました」と言い、主が自分にこれらのことを話されたと伝えた。

説教要旨

マグダラのマリアは墓の外にたたずんで泣いていました。主イエスを十字架で失い、亡骸さえもどこかに行ってしまいました。悲しみに満ち、途方に暮れ、泣くことしかできませんでした。私たちもただ涙が出、望みを抱けない状況の中に置かれることがあります。頼りとしていた人を失う、信頼関係を失う、穏やかな日々を失う、健康を損なう…。マリアは“独り”でした。独り

悲しみや苦しみの中に置かれるのです。

そんなマリアが独り泣きながら、墓の中を覗き込むと、二人の御使いがおりました。(v13)彼らは「女の方(v13)」と女性への一般的な呼びかけで呼び、「なぜ泣いているのですか(v13)」と悲しみの理由を問い問わせました。復活された主イエスも墓の外に立っていましたが、彼女は気づきませんでした。主イエスも「女の方」と呼び、涙の理由を問い問わせ、さらには「だれを捜しているのですか(v15)」との尋ねを加えました。主の復活を全く考えておらず、物体としての亡骸を失ったことを悲しんでいるマリアに「何を」ではなく、「だれを」と尋ね、ご自身の復活に気づかせようとされたのです。でもマリアの心の眼は閉ざされたままでした。(v15)主イエスはそうした彼女の名を呼ばれました。「マリア(v16)」マリアの悲しみをすべてご存知で、その悲しみと悲しみの根である主への不信頼から連れ出すようにして「名」を呼ばれたのです。彼女ははっと心の眼が開かれ、主イエスだと分かり、答えました。「ラボニ(v16)」マリアは喜び主イエスの足にすがりつきました。主イエスはしばらくして彼女に告げました。「わたしにすがりついてはいけません。わたしはまだ父のもとに上っていないのです(v17)」マリアは主イエスを「先生」と呼びました(v16)。主イエスは十字架で死なれ、復活され、永遠のいのちをもたらす救いの御業を成し遂げられ、主イエスの御思いは天に昇り、聖霊を送られ、人々を「永遠のいのち」に与らせることでした。だからそれを妨げるようにして「すがりついてはいけません(v17)」と仰せられたのです。マリアに、今までの「先生」という人間的な交わりではなく、聖霊を遣わし、永遠のいのちをもたらすことを教え、その永遠のいのちの交わりに与らせようとされたのです。「牧者は自分の羊たちを、それぞれ名を呼んで連れ出します(10:3)」「わたしが来たのは、羊たちがいのちを得るため、それも豊かに得るためです(10:10)」「それぞれ名を呼んで(10:3)」です。ダビデは「主は私の羊飼い(詩篇23:1)」と「私の」と歌いました。主イエスは私のすべてを真にご存じで名を呼び、悲しみと不信頼から連れ出し、日々の歩みに助けを与え、聖霊によってこの世の苦しみの中で永遠のいのちに生かし続けてくださるのです。人は朽ちていきます。頼りとしていたものを失うこともあります。しかし、主イエスは朽ちないお方です。主イエスは死に打ち勝ち復活され、いのちの日の限り、そして死の時もともにおられ、天の御国に私を導き入れ、天の御国においては私の涙をことごとく拭い取ってくださるのです。(ヨハネ黙示録21:4)

主イエスは、いのちの主といのちにマリアを与らせ、そのいのちの主といのちを弟子たちに伝えるよう託されました。マリアは主の仰せの通りになしました。マリアは2節では弟子たちに「主の不在」を告げましたが、18節では「主が生きてともにおられること」を告げたのです。主イエスは、私たちにいのちの主の証しを託してくださっておられるのです。

「なぜ泣いているのですか」主イエスは私たちの涙を十分に知りつつ、ご自身が生きてともにおられることを語りかけ、その涙から連れ出そうと名を呼んでくださっておられ、いのちの道へと導き続けてくださっておられます。私の羊飼いである主イエスに感謝をささげ、主に信頼し、そしてその羊飼いなる主イエスの証しに生きていきたいと願います。